

台湾における「日本神」の2つのイメージ

—現地のイメージと日本での報道—

藤野陽平

はじめに

この20年ほどで、日本と台湾の宗教交流は大きく展開した。戦前台湾にあった神社や寺院は戦後なくなったが、20世紀末から新宗教を中心とした日本宗教の台湾での活動が活発になっている。他方で、台湾への日本からの関心も広がっている。その理由の一つに、台湾が親日的であるということが広く日本社会に伝えられるようになってきた点があげられる。20世紀末までの日本においては、太平洋戦争の結果、アジア諸国とりわけ東アジアの国々の対日感情がよくないという言説が、マスメディアを中心に支配的であった。しかし、昨今では大多数の台湾住民にとって、日本は憎むべき侵略者ではなく、むしろ近代化をもたらした恩人という記憶が広く構築されるようになってきた。こうした状況があるので、日本社会では反日感情が強いとされる中国、韓国と比べて相対的に、親日台湾言説が広がっているのだと考えられる。

台湾側の背景を取り上げれば、戦後の国民党による独裁政治が行われていた頃には、親日的であることを公言すること自体が危険を伴うものであった。だが、1987年に戒厳令が解除され、1988年に蒋介石の長男である蔣経国総統が死去して、本省人出身の李登輝が総統に就任した。台湾の民主化が急速に進むにしたがって、それまで中国人であるというアイデンティティを強要されてきた台湾住民の多くは、それに対する反発もあって、台湾人アイデンティティを強め、親日反中という態度をとるようになっていった。現在の台湾では台湾が中国の一部であるなら大日本帝国の版図に戻してくれた方がいいという日本統治期生まれの年配者さえ存在する。また日本のポップカルチャーや日本製品を好む哈日族と呼ばれる若者達がみられたりする。交流協会¹⁾(現、日本台湾交流協会)が実施した調査でも、台湾人にとって好きな外国としては、日本が2位以下を大きく引き離し不動の一位を獲得している(交流協会2016)。

日本側もこうした親日台湾言説を歓迎する向きがあり、毎日のように台湾を

世界一の親日国としてメディアが紹介し親日台湾イメージを強化するような書籍の刊行も相次いでいる。

1. 日本神が取り上げられる背景

このように 21 世紀に入り日台は強い友好関係が維持されていると言えるが、そうした状況の中で生まれた親日台湾言説の一つに注目したい。それは「親日的な台湾では戦前の日本軍人が神として崇められている」というものである。台湾には「日本天皇」からはじまって旧日本軍人や警察官、中には「にほんぐんかん」(写真 1) を神として祀っている宗教施設も存在する。世界から愛される日本、その代表の台湾という言説を渴望する人々も少なからず存在するので、台湾人が神として崇拝する日本人についても近年マスメディアにおいてしきりに取り上げられるようになった。

三尾裕子(2017)によれば、こうした日本神を祀る宗教施設は 2016 年 3 月末現在で把握しているのが 41 か所、神の種類は 29 種類²⁾ とのことである。そのうち多くは参拝する人も滅多にいない、小さな祠のようなものに過ぎなかったり、地元台湾の神が主神であり日本神は副神としてその主神の部下に位置づけられたりしているケースがほとんどであって、地域の信仰の中で重要視され



写真 1 高雄市鳳山区に位置し、郭府千歳を主神とする紅毛港保安堂には「海府大元帥」という日本神と「38につほんぐんかん」と名付けた軍艦も神として祀っている。

ているとは言い難い。しかし、中にはメディアで頻繁に取り上げられ、多くの日本人が訪れることで活況を呈している廟も登場している。本稿で紹介する台南市郊外に位置し、戦死した旧ゼロ戦パイロットを祀る飛虎將軍廟がその典型である。この廟では、祝詞として朝は「君が代」、夕方は「海ゆかば」が流され、近年日本人が日本式の神輿を奉納し、祭りの際には日本人グループが大挙して参加し、さらに飛虎將軍の故郷である水戸に神像を里帰りさせる。これらの様子は、複数のメディアの紙面を賑わせている。

こうした飛虎將軍廟をめぐる親日台湾言説の典型的なものをまとめると、次のようなことになろう。

東日本大震災の際に世界一の支援を行った親日的な台湾で、村を救った日本兵が顕彰され神格化され、戦後しばらく親日的なものは政治的に排除されたが篤い信仰で反日的な当時の社会を乗り越え、台湾社会では今なお自己犠牲に代表される「日本精神」が重んじられている。

このような言説が増幅し、台湾の日本神信仰へ向けられる日本からのまなざしは過熱しているのであるが、これをどう理解したらいいのだろうか。この点をメディア分析を中心にフィールドワークで得た情報で補足しつつ考察することとする。

飛虎將軍廟をめぐるメディアにおける言説にはいくつか問題が存在する。第1に誤解が多いことである。例えば『室蘭民報』2015年5月17日付の記事によれば、飛虎將軍廟の祭礼の日本人参加者が「祭りに訪れた何万人もの人から『ありがとう』『リップンチェンシン（日本精神）』の声が響き渡っていた」、「『リップンチェンシン』が普段の会話で使われていることに驚いた」と述べたとされている。

もちろん、筆者はその場にいたわけではないので断定できないが、日常の台湾社会で「日本精神」という言葉が使われることは非常にまれである。「日本精神」の単語が飛び交うというのは、日本神の神輿が奉納されたという特殊な空間での出来事とみるべきだろう。また「祭りに訪れた何万人もの人」とあるが、この旧暦の3月15日は保生大帝³⁾という台湾で広く信仰されている神の誕生日で、台湾全土の保生大帝廟で盛大な祭典が行われる。飛虎將軍廟の母廟である海尾朝皇宮は現地の信仰の中心的な廟である。数万人とされる参拝客は保生

大帝の誕生日を祝うために集まった人々であって、飛虎將軍の神輿の奉納を祝うために集まった人々というわけではない。

また、早坂隆が『中央公論』で連載していた「早坂隆の鎮魂の旅」の中では、飛虎將軍について「その軍人は『現地では有名人』であり」と、述べられているが、飛虎將軍をはじめとする日本神は台湾で決して広く知られた神とはいえない。台湾で有名な神と言えば土地公や王爺、媽祖、閩帝、玄天上帝、保生大帝といった神があげられるだろう（劉 1994：124-128、渡邊 1991：14-36 等）。こうした神々について台湾人であれば、たとえ道教や民間信仰について関心がない人であってもその名前を大多数が知っている存在である。

しかし、飛虎將軍や日本人が神になっている廟はそういう存在ではない。筆者が調査した 2018 年の飛虎將軍が参加した神輿の練り歩きの際に、道行く人たちは目の前を歩いて行った法被を着た日本人に担がれる神輿（写真 2）に怪訝そうなまなざしを向けていた。近くでビデオを撮影中の筆者は、この神輿について尋ねられたことがあった。この神輿は旧日本軍人が神になっている飛虎



写真 2 法被を着て飛虎將軍の神像を乗せて日本式の神輿を担ぐ人々。この場面は飛虎將軍廟を出発したところ。

將軍廟というものであり、日本人が神輿を奉納し、日本人が担ぎに来ているのだと伝えたところ、その女性は初めて知ったと言った。その他、神輿の行列を見学していた複数の人々に飛虎將軍を知っているかと質問したが、知っているという人は誰一人としていなかった。2016年9月23日付の『東京新聞』（茨城版）に、飛虎將軍が出身地である水戸に「里帰り」した際の記事が掲載されている。そこに茨城大学に留学している台湾人の話として「飛虎將軍のことは知らないがとても驚いた」とあるが、これは台湾人がもつ一般的な意見を反映していると言える。

第2の問題は、現地の宗教実践としての説明が完全に抜け落ちていることである。台湾の民俗宗教の世界では、一部の例外⁴⁾を除いて大多数の日本神は「鬼」という非業の死を遂げ、祀らなければ崇られる無縁仏のようなものとして位置づけられる。大多数の日本神は参拝する人がめったにいない小さな祠のようなものである。どの神様に参拝するかは、ほとんどの台湾人は靈験があるかどうかで判断している。その対象が何人であるとか、どこ由来であるかということとはさほど重要な問題ではない。

これは他の事例で考えればすぐ分かることである。タイから持ち込まれた四面仏が靈験あらたかであると評判になり、若者を中心にひっきりなしに参拝客が訪れている場所が台北市内にあるのだが、ここに参拝する人たちが親タイ的ということにはならない。神が由来する場所をもって、その国への親近感を判断する論法では、仏教徒だったら親インド（そして親ネパール）、キリスト教徒だったら親イスラエルということになってしまい、おかしな話になる。

飛虎將軍廟における宗教実践にとって、シャーマンを介した神との直接交流を欠くことはできない。現地でインタビュー調査を進めていくと飛虎將軍に日本式の神輿が奉納されたり、水戸市に里帰りしたりした際には、飛虎將軍がそれを望んでいたと神の意思が示されることがある。こうしたこと背景には、いくつかの種類シャーマンの存在がある。童乩（タンキー）と呼ばれる神が憑依し、神そのものになるものや、通靈と言ひ神の意思を聞くことができるものや、手轎（写真3）と呼ばれる小さな椅子を2人で持つとその椅子の上に神が座り持ち手の意思ではなく動きはじめ、その椅子が文字を書くことで神の意思を伝えるというものなどである。その他にも夢枕にたったりするようなこと



写真3 小さな椅子のようなものが「手轎」と呼ばれるもので、ここに神が腰かけ自動的に動き出すといわれている。

もある。けれども、こうしたいわゆるフォークレリジョンに属するような実践が背景にあることが、日本において報じられることはまずない。

第3に飛虎將軍という名前も誤解を呼びやすい。山路勝彦も日本神に関する論考の中で指摘しているように、日本で將軍と言えば武士の世界を統括する最高権力者を意味するが、道教の世界観ではあくまで「玉皇上帝」「三官大帝」などと帝の字を持つ神が上位に位置し、「將軍」は文官の下に位置する武官でしかない上に、武官の中でも「元帥」よりも下位に位置づけられるような神である（山路2007ほか）。

飛虎將軍も現地の保生大帝という神の許しを得て神となった存在であり、現地では保生大帝は飛虎將軍の先生のような立場であると理解されていて、飛虎將軍よりも重視されている。報道を注意して読めば「地元の別の神」のように保生大帝の存在をにおわせる記述が散見されるのだが、こうしたことを知らない読者にしてみれば、台湾で旧日本軍人が神とされ朝夕に「君が代」、「海ゆかば」が祝詞として歌われているというのは強烈なインパクトを与えるので、地元においてははるかに重視されている保生大帝の存在などは思いもつかないである

う。

台湾の日本神と一口にいても多様性がある。ここで主にあつかう飛虎將軍は杉浦茂峰という実在の人物が神格化した場合である。だが、三尾が指摘しているように、多くは夢見などの方法で台湾人の前に現れ、実在かどうかわからないケースである（三尾 2017）。山路は、飛虎將軍廟をはじめとするいくつかの日本神信仰の基礎には鬼の信仰があるが、日本の旅行者はそれを知る由もない上に、英雄としてのみ理解することで現地の宗教実践と訪問する日本人観光客との間の知的隔たりがあることを指摘している。山路の調査時には飛虎將軍が従来持っていた祟り神としての性質と、年配の日本人のように皇軍兵士として英雄視するのとも異なる新しい物語の創出が予見されている（山路 2007）。山路の報告から 10 年ほどたった今、飛虎將軍や日本神をめぐる宗教実践はどうなっているのだろうか。

2. 日本神、飛虎將軍廟について

台南市安南区大安街に位置する飛虎將軍廟（写真 4,5）はウェブサイト (<http://www.hikoshogun.org/>) によれば、1971 年に創建されたという。当時 4, 5 坪の小さな祠に過ぎなかった本廟は 1993 年に 50 坪の廟に建て替えられた。なお、飛虎將軍廟は独立した廟ではなく、近隣において影響力の大きい海尾朝皇宮（写真 6）という保生大帝を主神とする廟に従属しており、実際に廟を運営も朝皇宮の管理委員会が取り仕切っている。

飛虎將軍に関する伝説は後述するが、旧暦の 10 月 16 日が誕生日にあたる「聖誕千秋」であるほか、旧暦 6 月 20 日と 12 月 20 日に「賞兵」、旧暦 7 月 15 日に「中元普渡」といった儀礼が行われる。また、旧暦 3 月 15 日の保生大帝の誕生日の近くには朝皇宮の大きな儀礼が行われるが、近年日本人によって飛虎將軍廟に神輿が奉納されたことでそのパレードに参列するようになった。

「歓迎日本国の皆様 ようこそ参詣にいらっしゃいました」（写真 7）と書かれた横断幕をくぐって飛虎將軍廟に一步足を踏み入れると、中華民国の国旗である「青天白日滿地紅旗」と、日の丸が掲げられ、その他靖国神社の御札や日本酒も供えられている（写真 8）。壁には杉浦茂峰の生前の写真の他、杉浦やゼロ戦を主題にしたイラスト、日本から奉納された品々、取り上げられたメディ



写真4 飛虎將軍廟外觀。

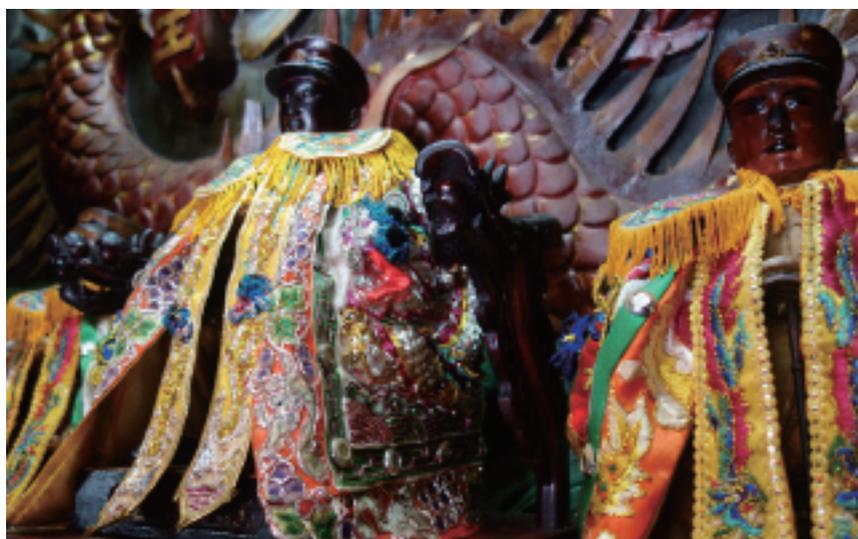


写真5 飛虎將軍の神像。



写真6 飛虎少雨軍廟の母廟にあたる海尾朝皇宮。祭典の際などには多くの人が参拝に訪れる。



(上から)
写真7 日本人参拝者を歓迎する横断幕。

写真8 飛虎將軍廟内部。

写真9 奉納された飛虎將軍杉浦茂峰やゼロ戦をモチーフにした作品などが展示されている。

ア報道のコピーなども置かれている（写真9）。旧日本軍人である神に対して祝詞として朝に「君が代」、夕に「海ゆかば」が流され、神の像に生前好きであったとされるたばこが供えられること等がメディアで伝えられている。

参拝者は近隣に住む住民以外は、日本からの参拝客が大多数を占めている。台湾で広く受け入れられているという報道もあるが、それは残念ながら言い過ぎであろう。また、あくまで海尾朝皇宮に所属する廟であって主体は朝皇宮である。こちらの廟は地域の文化センター的な役割を果たし、社会貢献活動をはじめ宗教以外の様々な活動を行い、参拝客も多い。

飛虎將軍廟への日本からの参拝客であるが、人数を数えているわけではないので不明とのことである。だが、廟内に芳名帳が置かれており、日本からの多くの参拝客が記入している。私が飛虎將軍廟に訪問し、芳名帳の人数を数えさせてもらったところ、2016年3月16日から2017年3月16日の間に延べ1,400名ほどが、2017年6月10日から2018年6月9日の間には延べ1,560名ほどが記名している。記名していない人もいることを考えればこれ以上の日本人が訪れていることになり、おおよそ1日につき、3、4人ほどが参拝していることになる。

飛虎將軍廟について、特筆すべきは近年、積極的に日本との交流に取り組んでいる点である。2015年3月にイベント企画のクロフネカンパニーの社長中村文昭氏が、飛虎將軍廟に日本式の神輿を奉納した。飛虎將軍廟のウェブサイト（http://www.hikoshogun.org/tw_palanquin.htm）によれば、2014年5月に台湾に東日本大震災の感謝を伝えるツアーの中で飛虎將軍廟に立ち寄った日本人グループが杉浦茂峰のことや、廟が建てられて祀られていることを知り、帰国後中村氏が飛虎將軍のために神輿を作るために募金を始めたという。この神輿は日本式というだけではなく屋根の上の鳳凰がゼロ戦になっている等の特徴もある（写真10）。

完成した神輿は2015年3月には台湾に運び込まれ10日の当日には中村氏を代表とする60人の日本人が日本人の神職と台湾の法師が共同で行う儀式と祭典に参加し、4月30日には《海尾大道公生平安行字遶境》⁵⁾に200名の日本人が参加したという。

2016年には飛虎將軍杉浦茂峰の出身地である水戸市に飛虎將軍の神像を「里



写真 10 日本人から奉納された日本式の神輿。

帰り」させた。2016年9月20日付『東京新聞』（茨城版）、同22日付『産経新聞』、同23日付『朝日新聞』（茨城版）、同24日付『茨城新聞』、同27日付『茨城新聞』によれば、21日朝皇宮の管理委員会26人と共に神像来日している。

22日には茨城県護国神社で慰霊祭が行われ、水戸市の関係者や国会議員も参列した。その後、神像を神輿に載せて、あいにくの雨の中、水戸市内を練り歩き、水戸芸術会館から杉浦茂峰の生家跡など2キロほどを巡り、水戸市長らも参加した。また、この訪問に先立つ15日には生家跡に日本語英語中国語による杉浦茂峰の功績をたたえるパネルも設置された（東京新聞2016年9月23日（茨城版）、朝日新聞9月23日（茨城版）、茨城新聞9月24日）。23日には一行は水戸市役所を訪問し、市長と懇談し、杉浦茂峰の母校も訪問している。

この里帰りのきっかけになったのは、2016年春に飛虎將軍廟を訪れた日本人作家が飛虎將軍が里帰りしたいと言っているという夢を見たことによるという。朝皇宮の管理委員会が神様にお伺いをたてたところ間違いないという事になり、実現することになったのだそうである（産経新聞2016年9月22日）。

また、水戸市在住の藤田和久氏の働きも伝えられている。藤田氏は国会議員秘書を務めていた2012年当時、戦争で家族を亡くした遺族へのインタビューのためインターネットで調べ物をしている際に飛虎將軍廟のことを知り、すぐに台南を訪問、飛虎將軍廟への信仰を知り衝撃を受け、以来水戸市と台南市との交流に尽力し、水戸市にも働きかけたという（東京新聞2016年9月20日（茨

城版))。

3. 日本神の語られ方『街道を行く』と『ゴーマニズム宣言』とその反響

飛虎將軍廟が日本から注目を集めるようになったのはそれほど古いことではない。筆者が飛虎將軍廟のある台南市に留学していた2005～7年の時点でその存在は知っていたものの、交通の便のよくない郊外にあり、わざわざ足を運ぶほどのこともないと考えていた。日台の宗教の関係を調査しているときのインフォーマントたちも、飛虎將軍廟について特に触れることはなかった。単に情報に疎かただけかもしれないが、当時は以下の2つの書籍で紹介されたばかりであり、日本人の日本神訪問が一般的になる前の時期であった。

(1) 司馬遼太郎『街道を行く 台湾紀行』のインパクト

日本人が神となる宗教施設について、台湾の宗教研究者だけではなく一般の日本人にも知られるようになるきっかけとなったのは、司馬遼太郎の『台湾紀行 街道をゆく40』(司馬1997:249-250)で、これが取り上げられたことであろう。交流協会台北事務所所長から、台南市付近の村で旧日本軍人の慰霊祭に立ち会ったことを聞いた司馬は「そこで祀られているのは日本軍の航空兵」とし、これを「おそらく万善堂かと思える」と指摘している。あくまで伝聞の形であるが、司馬遼太郎という訴求力のある論者が紹介したことは、その後の日本神をめぐる言論空間に少なからぬ影響を与えている。なお、万善堂とはいわゆる無縁仏を祀る小さな祠の一種のことである。

この司馬の文章に対して複数の文献で反応が見られる。例えば許監修、名越他編『台湾と日本・交流秘話』(1996)の175頁には、飛虎將軍廟に関する記述がみられ、司馬の説明に対する違和感が表明される。

司馬遼太郎氏は『街道を行く—台湾紀行』の中で、飛虎將軍廟が台湾の民間信仰と結びついている点に着目している。氏は、この廟が生まれた背景に行き倒れの人々の骨を集めて供養する「万善堂信仰」に近いものがあり、福德を授けてくれるかもしれないと期待する「民間道教」が生きている、と指摘する。たしかにこんな面も否定できないが、私は関帝廟に近いものも感ずる。

司馬が提示した飛虎將軍の孤魂としての側面を「たしかにこんな面も否定できないが」と消極的に受け入れるものの、関帝廟のような神明の廟であると主張するが、その根拠は「感ずる」というだけで、特に根拠は示されない。司馬はこの本を記すにあたって「毎日、台湾についての本を読んだ。「フォルモサ」とよばれたこの島の大航海時代の記録からオランダ時代、鄭成功時代、清朝のころの渡来民による西部平野の開拓、また非漢民族についての考古学、文化人類学の本、さらには日本統治時代のこと、製糖業のこと、風俗誌、考古学の報告書、台北帝大に関する本、各中学校の同窓会誌、孫文伝、蒋介石伝、蔣経国伝、“中華民国”の到来とその戒厳令下のことも、また自費出版の自伝や手記のたぐいまで読んだ。/おかげで、半人前の台湾人になれたような気がして、4月、ふたたび来た」(前掲書 p.367)と述べている。

司馬ほどの人物がそこまで言っている以上、かなりの読書と文献調査を踏まえての発言であるはずである。しかし、本書ではその内容を根拠も示さず「感ずる」という印象論的な議論で否定している。

『台湾紀行』にも老台北として幾度となく登場し、司馬を台湾の恩人(蔡2000)と敬愛する蔡焜燦も、2002年8月7日の『SAPIO』に寄せた文章で「司馬遼太郎は飛虎將軍を萬姓公みたいなのというが、それは違う」と司馬の飛虎將軍=無縁仏言説に反対している。しかし、私のフィールド調査で実際に現地を訪問し関係者への聞き取りをすると、飛虎將軍は死後、「鬼」と呼ばれる、いわゆる日本の無縁仏に近い、祀る者のない孤魂であったが、保生大帝という現地の神に認められ飛虎將軍という神になったと理解されている。

司馬をして「博覧強記」(司馬1997:223)と言わしめた老台北蔡焜燦ほどの人間がそのことを知らないとは考えにくい。その彼がどうしてここまで、飛虎將軍≠無縁仏言説にこだわるのだろうか。

(2) 小林よしのり『新ゴーマニズム宣言スペシャル・台湾論』

2000年に刊行された小林よしのりの『新ゴーマニズム宣言スペシャル・台湾論』(以下、『台湾論』)の「第11章 台南と許文龍」(小林2000:228-230)にも、日本神に関する記述がみられる。本書は漫画であるが、文字の部分

だけを引用しておこう。

飛虎將軍廟 ここは 1944 年「台湾沖航空戦」でグラマンに体当たりして散った杉浦兵曹長ら 3 人の下士官が地元の人によって神として祀られている。

廟の奥には日本軍の軍服に身を包んだ 3 体の神像が置かれ日本兵の写真も飾ってあった。

この廟の祭祀を司っているのは呉江池氏でなんと朝の祝詞は「君が代」夕方は「海ゆかば」が奏上されているという。

台湾で今に至るまで民衆に尊敬され偲ばれている日本人神様になってしまった日本軍人・警察官は非常に多いようである。

(中略)

このような台湾で神となるまでに慕われた戦前の日本人の存在を知って戦後の我々は日本人としてのナルシズムを感じていられるだろうか？

とんでもない！矮小で不誠実になってしまった自らを恥じるだけである。

現代日本では戦後の我々は戦前の日本人よりも賢く正しく生きているかのよう言説がまかり通っている。

「戦前の日本は植民地を持っていた即ち帝国主義よって悪」この単純なサヨク・イデオロギーの信者たちには西欧の植民統治と日本のそれを比較してみることもできない そのようなサヨク信者にとって台湾の人々の統治時代の日本人への思いというものは相当に悩ましいものであったろう。

戦後の我々に比べれば戦前の祖父たちがどれだけ誠実でスケールの大きいものを持っていたか… 祖父たちを悪として断罪し同じ日本人として罪悪感を持っているふりを装いながら自らだけでは誠実であると信じ込む… 歪んだナルシストたちが現代の日本にはあまりに多い。

ここで小林は「台湾で神となるまでに慕われた戦前の日本人」と台湾から慕

われる日本人という文脈で日本神を紹介している。ここでは戦前の日本人を「誠実でスケールが大きい」とし、それと対比させる形で戦後の日本人を「矮小で不誠実になってしまった」「歪んだナルシスト」と断ずる。ここには典型的な形での「あの頃は良かった」というノスタルジアの構造が見て取れる。この論法では過去を極端に美化し、当時の不都合な部分は後景に追いやるといった問題点があるが（日高 2014、藤野 2016）、小林の戦前の日本礼賛、戦後の日本批判という論法からの日本神紹介は、事実と異なり不適切である。

実際に小林の見方には誤りも多く、複数の研究者より異議が寄せられている。戴文峰は『台湾論』に対する台湾研究者からの批判本の中で、戦前の日本礼賛に終始する日本神理解を、現地の民俗宗教研究の視点から批判している。さらに巻末の自己紹介のひとつでは「小林氏が描いた『神様になった日本人』は、今では台湾人にとって現世利益の願掛けの対象（例えば、宝くじ）に過ぎません。民間信仰というものは、もっと複雑な背景を持っているのです」という。

胎中（2007：39-40）も次のように批判する。

「小林よしのりも『台湾論』でふれているように、台湾には戦前に実在した日本人巡査や日本軍人を神として祀っている寺廟が存在する。例えば台南にある飛虎將軍廟（中略）。これらもその神様にご利益があるかないかが大事なのであって、出自が日本人であること自体には実はあまり意味がない。『台湾では日本人が神様になっている』などとことさらに感動するのは見当違いというものである」

つまり、ご利益という文脈で効果のある神がたまたま日本人であったというだけのことで過度に親日と読み込むことに異を唱えているのである。

確かに台湾の民俗宗教の世界を見てみると幾多の神が祀られており、霊験があるかどうかで大きな廟に発展したり、逆に誰も来ない廟になったりしている。甚だしきに至っては入手した神像を拜んでも効果がなかったということで、廟にそういう神像を集めておいておく（つまり捨ててしまう）場所があったりもする。上述のように日本神は 50 件以上あるとされており、大多数の日本神はこうしたあまり人が祀らない小さな祠のようなものである。日本が尊敬されているというその理由だけで飛虎將軍廟の信仰を読み解いても、その一局面にし

か光を当てていないことになる。現地のフィールド調査からはシャーマニズムや民間信仰の世界観と親日感情が入り混じったより複雑で生き生きとした豊かな宗教実践がみられる。小林のこうした描き方は、現地の宗教実践という文脈を無視したものと言わざるを得ない。

さらにもう一点問題を指摘しておきたい。それはかなりの読書に裏打ちされた記述である司馬遼太郎の紹介や、現地社会を深く掘り下げて調査している研究者からの指摘が、その後のメディア報道においてほぼ無視されているということである。次章でもわかるように、反論らしきものは、「体当たり攻撃に感銘したというより、名前が分かった戦死者の鎮魂のためまつたようだ」と述べる2000年1月31日付の『東京新聞』以外に見られない。親日台湾言説にだけ依拠した飛虎將軍廟の紹介の文脈ではおおむね無視され、飛虎將軍≠無縁仏言説に基づいたマスメディアにおける報道が再生産され続けている。

4. 日本のメディアにおける日本神の語られ方

(1) 変容する飛虎將軍をめぐる伝説

飛虎將軍、すなわち杉浦茂峰が、どのように死に至ったのかという記述に関して、前節での紹介から一つの矛盾のような面が見えてくる。司馬によれば、被弾した杉浦はすぐに落下傘で脱出すれば助かったものを、人の暮らす村に墜落するのを避けるため、自らの命を顧みず人のいない方向に機首を向けたので、脱出が遅れ米軍機の追撃を受けたとなる。他方、小林によれば「1944年『台湾沖航空戦』でグラマンF6Fに体当たりして散った」と米軍機に体当たりして死んだことになっている。

基本的に廟の伝説であるので、複数のものが並立するのは、台湾では全く奇異なことではない。むしろ「合理的」に考えてしまうと相矛盾する複数の伝説を重ね合わせることで、より豊かで深みのあるフォークロアの世界が醸し出されることのほうが多い。例えば吉原元帥と呼ばれる日本軍人を副神として祀る慶隆廟（写真11、12参照）という廟が、台南市郊外に存在するが、この吉原小造という名の日本人について廟のパンフレットにはこうある。すなわち、1661年に鄭成功がオランダから台湾を奪取した際の日本人の部下であるが、同時に1891年に東京の田津佐生まれ、北白川宮能久親王の部隊に配属され33

歳の時に台南で毒矢にあたって死んだ人物だとする。多津佐というのがどこのことなのか、そういう地名があるのかすら不明であるが、史実として考えると、北白川宮能久親王は 1895 年の日清戦争後の台湾出征の際に死去している。吉原が 1891 年生まれ 33 歳で死去ということでは計算が合わない。そもそも鄭成功の部下なのか北白川宮の部下なのか。しかし、台湾のフォークロアの世界では、こうしたことは大きな問題とされることもなく、それはそういうものとして、そのまま信仰されていたりするのである。

問題は飛虎將軍廟の伝説の舞台がはるか昔の出来事ではなく、当時を知る人が生存している近現代史の出来事であることに起因するだろう。これでは数百年以上前の昔話のような伝説としてだけ処理することが難しく、歴史的な検証も求められてしまう。伝説と歴史的事実が併存する現場をメディアはどう取り扱うのか。複数の伝説と歴史的事実との間で行われる日本のメディア報道の在り方を考えてみたい。

宗教情報リサーチセンターの宗教記事データベースによれば、日本における飛虎將軍廟の初出は、神社本庁前総長の櫻井勝之進が 1995 年 5 月 22 日『産経新聞』夕刊の「宗教・こころ」という特集に寄せた文章である。そこでは「台南の上空で空中戦があり、米機に体当たりして散華した日本兵」とされている。本文中でその情報源は「説明版を読んで」とあるので、口伝ではなく文章として明記されていたと考えられる。次に記述がみられるのは 1999 年 8 月 11 日『福島民報』への投書である。「杉浦総長ほか二名は米軍グラマンに体当たりして壮烈な戦死を遂げた」とされる。2000 年 1 月 31 日付の『東京新聞』では「弾丸が尽きた日本軍の一機が米軍機に体当たりし、両機とも墜落。この体当たり機が杉浦兵曹長だったと伝えられている」と弾丸が尽きたことが体当たりの原因であるとされる。

2002 年 2 月 16 日付の『西日本新聞』夕刊では、「うち一機の搭乗員は民家に落ちかけた機体を一旦引き起こし、集落の外まで飛んだ後に脱出。だが、敵機の銃撃で落下傘に穴が開き、パイロットは地面にたたきつけられて戦死した」と、村を避けて死亡したという伝説が登場する。2005 年 10 月 31 日付の『産経新聞』では「米軍機の迎撃に向かった杉浦茂峰少尉のゼロ戦が被弾。村に墜落しそうになった。しかし、杉浦少尉はパラシュート脱出を選ばず、機首を立



写真 11 謝府元帥を主神とする台南市の慶隆廟には日本神、吉原元帥が祀られている。すぐ横に「三霊公」、「千霊公」という無縁仏を祀る祠もあるような、もともと墓地があった場所で、現地では不吉な所とされるような場所に位置し、参拝客は多くない。



写真 12 主神の謝府元帥（写真中央）と吉原元帥（同右）、趙勝將軍（同左）。

て直して畑に突っ込み、村人に被害を与えなかった」とされる。

2003年には『西日本新聞』で「台湾の日本神」という連載が組まれている⁶⁾。5月11日付の第5回では飛虎將軍廟が取り上げられている。そこでは「杉浦は民家に落ちかけた機体を引き起こし、村外れで脱出したが、米機に落下傘を撃ち抜かれて死んだ」とされる。

2003年9月30日付の『産経新聞』への投書でも取り上げられた。「対米空中戦で墜落した杉浦茂峰兵曹長が村の人命と財産を守るため、村から離れた方向に操縦桿を向けて戦死したそうだとされている。2005年4月26日付の『山形新聞』夕刊では、「台南の空中戦で戦死した旧海軍航空隊のゼロ戦パイロット杉浦茂峰兵曹長が祀られている」とされている。また、2005年10月31日付の『産経新聞』では、こうある。「昭和19（1944）年に村に襲来した米軍機の迎撃に向かった杉浦茂峰少尉のゼロ戦が被弾。村に墜落しそうになった。しかし、杉浦少尉はパラシュート脱出を選ばず、機首を立て直して畑に突っ込み、村人に被害を与えなかった。／一部始終を見ていた村人は、自分の命よりも村人の安全を思った杉浦少尉を神とあがめ、廟に祭った」。

2006年2月18日付の『産経新聞』によれば「集落を戦火から救うために一身を犠牲にした杉浦茂峰海軍飛行少尉を祀る鎮安堂飛虎將軍廟」とされ、2006年2月22日の『夕刊フジ』（大阪版）では「昭和19年10月、フィリピンから飛来した米軍機を台南上空で迎撃し、戦死したという。／その際、火を噴いた杉浦機は、集落に向かって墜落するかに見えたが、直前に舵を切り直し、人家を避けて墜落炎上。『身をていして地元集落を守った英雄』というわけだ」、2011年6月4日付の『SANKEI EXPRESS』（共同、同日『信濃毎日新聞』夕刊も同様）では日本語ガイドの言葉として「敵弾を受け尾翼から発火し、急降下した機体は、急に機首を上げて、私達の集落を避けるように飛び去り爆発した。落下傘で脱出するタイミングが遅れ、パイロットは死にました」という。

このように日本で飛虎將軍が報じられるようになってからしばらくは、米軍機へ体当たりしたとされていたが、村を救うために脱出が遅れたというも伝説へ、2002年頃を境に変化していったことが見て取れる。体当たり伝説に関する報道も複数見られることから、単に誤報ということではなく、変わっていったとみるのが妥当であろう。

史実としてのゼロ戦パイロット杉浦茂峰と、伝説としての神、飛虎将軍とが、縦糸と横糸のように紡ぎ合わさって現地の信仰実践を構築している。この縦と横の糸を見極めずに報じてしまうメディアのあり方と、それをそのまま受け取ってしまう読者のメディアリテラシーが相互に増幅作用を果たしていることが見えてくる。この廟を信仰する人にとっては真実として語られているとしても、両者をメディアが適切な検証を経ないでそのまま報じることには問題があると考えられる。

(2) 奇妙な民間信仰から、心温まる物語へ

次に飛虎将軍に関する現地での宗教実践についての新聞等の記述をみてみたい。宗教記事データベースでは、櫻井勝之進による『産経新聞』1995年5月22日夕刊の記事が初出である。そこでは「今も祭日には堂守さん達が霊前で『君が代』を2回歌うということでした」と、君が代が歌われていることを紹介している。1999年8月11日付の『福島日報』への投書では、「杉浦兵曹長ほか2名の神像3体を作り飛虎将軍廟にお祭して、毎日午前7時と午後4時の2回、タバコをお供えして、朝は『君が代』、夕方は『海ゆかば』を肅々と歌っている」と紹介される。今日では歌うのではなくCDが流されている点、櫻井の記述では君が代が2回とのことだが、朝に『君が代』、夕方に『海ゆかば』になっている点等が異なっているが、概ね日々の参拝のあり方には今日と大きな変化はない。

2000年1月31日の『東京新聞』の記事によれば、飛虎将軍は宝くじに当たるなどの権能があるとされているという。蔡焜燦、伊藤潔ら知識人による台湾の文脈における非業の死を遂げた霊への信仰の説明を紹介したうえで、「お参りすると、宝くじの当選番号が頭に浮かび、その番号を買った当選者が続出した」と言われていたとする。そして、飛虎将軍を祀る小さな祠が廟と呼ばれる正式な宗教施設へと建て替えられたのは、参拝して宝くじが当たった不動産業者が建て替えたものであったとも述べられる。この記事でも日々の参拝については上述の記述と同様であるが、1987年までつづいた戒厳令下で、日本人を神とすることへの当局からの圧力があったことにも触れられている。

2002年2月16日付の『西日本新聞』（夕刊）によれば、廟の近くで漢方薬

店を営む関係者の話として「戦後 20 年ほどたって、その場で突然牛が暴れたり、農民が腹痛を起こすなどの出来事が相次いだ」といい、本人のおじも白い海軍服を着た人影を見たという。「ある別の廟で占ったところ杉浦さんの霊と分かった」といい、住民たちは慰霊のため「小さな廟を建立」、「祈ったら商売が繁盛した」という。

2003 年 5 月 11 日の『西日本新聞』が連載した「台湾の日本神」の第 5 回で、飛虎將軍廟を扱っている。「落ちた場所で牛が暴れたり、夜中に白い海軍服の男を見た、といううわさが広がった。道士は『杉浦の霊』と占った」、「71 年、村民は恩人のために小さなほこらを作った。それが『祈ると商売が繁盛する』などと評判になり、93 年に本格的な廟に建て替えられた』としている。

このようにこの時期までは『君が代』『海ゆかば』を使用した参拝のされ方に加えて、商売繁盛、宝くじが当たるというご利益の話もされていたのだが、この頃を境に、シャーマニズムに基づいた記述や宝くじに当たるお金が儲かるという記述が減り、旧日本人が神とされて信仰を集め、祝詞として朝夕に「君が代」、「海ゆかば」が流されているという記述に重点が置かれるようになってきている。以前は、台湾では旧日本軍人が神になっているということを奇妙な信仰と捉えられていたが、徐々に台湾は親日的であるという言説に変容しつつあると言えそうだ。

ただし、付け加えておきたいのは、日本側のまなざしの変化だけが、こうした言説の変容の原因というわけではないということである。2003 年の『西日本新聞』に「宝くじの神と報道されたこともあった。今、漢方薬店を営む呉さんは廟の顧問も務めるが、この手の話題は嫌いらしい」と伝えられているように、組織の指導者の変更によって以前行われていた商売繁盛、宝くじが当たるといった現世利益性の強い霊験よりも、自己犠牲を通じて民衆を救う神という物語が好まれるようになってきていることも関係している。以前飛虎將軍廟を訪問した友人の話によれば、当時、商売繁盛のお守りを入手したというが、今日こうしたものは置かれていない。

確かに自己犠牲を顧みないで村を救った神を祀っている人たちが、祈っているのは宝くじが当たるようにというのでは、日本からやってきた参拝客が興ざめと感じてしまうというのは分からなくもない。例えば 2000 年 1 月 31 日『東

京新聞』に見られる「宝くじが当たった不動産業者が建て替えた」という言説であるが、私のインタビューでは単に地域の裕福な人が多額の寄付をしたというだけで、宝くじに関する語りは聞かれない。日台が同じような方向への変容を生んでいるとも理解できるのである。

こうして、宝くじが当たるという霊験を後景化し、自己犠牲の神が村から慕われるという物語を焦点とすることで、より日台友好という場面にふさわしいと捉えられているのだろう。こうした見方は日本側の報道には当初から根強い。宗教記事データベースにおける初報の櫻井勝之進（神社本庁前総長）による1995年5月22日付『産経新聞』夕「宗教・こころ」は、飛虎将軍の自己犠牲の面に焦点を当てこう説明する。

「今は日本と国交すらない台湾の地で、台湾の人々が日本軍人の英霊をこのように立派なお堂を建てて祭り、日本の若者たちがその歌詞さえよく知らない「君が代」が歌い継がれている。－これは大きなショックでした。（中略）あなた方と同年代の若者たちが、たった一つの生命を捨てて、この祖国を、あなた方の家族を、守ってくださったのだという事を」

そして、若くして戦争で死んだ当時の若者たちに「近くの護国神社かできれば九段の靖国神社で、どうぞ一言、お礼を申し上げます」と結論付けている。

こうした村を救うために脱出が遅れた言説と、親日台湾言説に基づき、近年各種メディアでも取り上げられるようになってきている。代表的な例として、2016年9月27日の日のテレビ朝日系列の「モーニングバード」、TBS系列で放送中の「日立 世界ふしぎ発見！」の2017年2月11日に放送された第1424回「不思議な神様がいっぱい 開運ワンダーランド台湾」と、日本国内における代表的な海外旅行のガイドブック『地球の歩き方』でも紹介されている。

むすび

これまで見てきたように日本神をめぐる宗教実践は台湾の民俗宗教の文脈で

は崇る鬼から福を与える神へと変化した幾多の神々（三尾 1990）の一つに位置づけられるべきものである。その代表は王爺という神であるが、王爺以外にも特に南部には不吉なものを祀るうちに平安を与える神になっていったというフォークロアの例は多く、数え切れないほどであって、特段注目を集めるものでもなかった。

その後、日台両国が親日台湾言説を求めるようになり、いくつかの日台友好のシンボルとして日本神に注目が集まるようになっていった。このこと自体に問題はないが、日本における日本神の伝えられ方には批判的視点が必要である。研究者からの先行研究に基づいた分析と報告は無視され、そこでは無縁仏であったことが隠滅され、米軍への体当たりではなく命を捨てて村人を護ったという伝説がクローズアップされることで、宝くじが当たるというような現世利益の側面がそぎ落とされるということが起きている。

言うまでもなく、宗教実践とは時代と共に変化するものである。たとえば川島修一は、ザシキワラシに関する言説が研究者やメディアの影響を受けながらそのイメージが変容していく様を、実証的に検討した。そこでは、もともと東北訛りで「ザスキワラス」や「ザシキワラス」と呼ばれていたものが、「座敷童」や「ザシキ童」という文字が与えられ、柳田国男の分類法に基づいて「座敷わらし」という妖怪を分類する述語に変化し、東北の間引きとも習合し、ついに柳田国男は昭和 31 年の『妖怪談義』のなかで家の神であったザシキワラシを妖怪の一種として扱うようになったという。さらにもともと一部の宗教者以外には目に見えない存在であったザシキワラシ（目に見えてしまうといなくなりその家が没落する）が、現代では旅行雑誌やマスメディアの影響を受けつつ人形や絵として表象され、みえるようになり、祀られるようになっていったという（川島 1999：226-266）。

川島はこの論考の中で、20 世紀の宗教の特徴の一つにマクルーハンに触れながら現代が視覚優位の社会であることにも一言触れている。さらに 21 世紀のメディアの特徴はなんといってもインターネットの普及という事に尽きるであろう。マスメディアとインターネット上の投稿とが相互に参照しあうことで、親日台湾という日本側のまなざしに日本神の実践が取り込まれ、台湾側もそれに応じる形で新しい宗教実践が構築されるという構図が見えてくる。さらに東

アジア諸国におけるツーリズムが21世紀にはいっそう活発になっていることが、その実践の背景にある。

もう1つの21世紀的な特徴としてあげられるのは、20世紀では良くも悪くも大きな役割を果たしていた研究者による研究成果が、あまり参照されなくなっているということである。20世紀にはその功罪が指摘されつつも、一定の影響が見出された研究業績であったが、21世紀に入り、それへの参照度合いが減り、メディアが構築した言説が再生産されることが多くなっている。マスメディアが時に現地社会の文脈を軽視し取材を行うことはしばしば指摘されてきた(飯田・原編 2005 他)。当然研究者による研究業績にも問題があり、ときに専門家でありながら十分な調査を行わず不適切な発言を行うこともありうる(平野・塚田 2015)。しかし、それであっても多くの場合研究者は極力現地の文脈を理解した上で発言するように努めている。

当然、マスメディアの報道も綿密な下調べと調査に基づいて行われるのであればいいが、飛虎將軍をはじめとする日本神に関する報道やマスメディアでの



写真 13 シャーマンに憑依した田中將軍に相談する人々

伝えられ方は、シャーマンによる口寄せに由来する情報を、そのまま無批判に拡散しているようにしかみえない。それが新聞等の報道でも伝えられているのであるから、台湾や宗教に関して特別な知識を持たない一般読者の宗教情報リテラシーでは、その内容の真偽を見極めることは困難であろう。

こうした台湾の宗教文化の軽視した日本神の伝えられ方には再考が必要である。自分の価値観を疑わず異文化の宗教文化に対する無理解に基づく行動は、様々なトラブルを生む危険性がある。これまでも様々なトラブルが生じてきたし、すでに日本企業においても、重大な結果を引き起こした事例が報告されている（高橋・藤野 2010）。

本章で論じた例から、日本神はいわば「心温まる」物語を強いられたともみなせる。こうした方向で、マスメディアに加えサイバー空間での再生産が続いても、それはいわば偽装された日台友好にもなりかねない。実際に起こっていることへの検証の姿勢は、情報化が進む時代であればこそ、いっそう堅持していく必要がある。

参考文献

- 飯田卓、原知章編、2005、『電子メディアを飼いならす 異文化を橋渡すフィールド研究の視座』せりか書房。
- 尾崎保子、2007、『保生大帝 台北大龍峒保安宮の世界』春風社。
- 川島修一、1999、『ザシキワラシの見えるとき 東北の神霊と語り』三弥井書店。
- 許国雄監修、名越二荒之助、草開省三編、1996、『台湾と日本 交流秘話』展転社。
- 国分直一、1981、『壺を祀る村 台湾民俗誌』法政大学出版局。
- 蔡焜燦 2000『台湾人と日本精神 日本人よ胸を張りなさい』日本教文社
- 酒井亨、2010、『「親日」台湾の幻想 現地で見聞きした真の日本観』扶桑社新書。
- 椎野若菜、2017、『マスメディアとフィールドワーカー』古今書院。
- 司馬遼太郎、1994、『台湾紀行』（街道をゆく 40）朝日文庫。
- 鈴木清一郎、1934、『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』台湾日日新報社。
- 戴文峰 2001「神様になった日本人」東アジア文史哲ネットワーク編 2001『<小林よしのり「台湾論」>を超えて』作品社
- 胎中千鶴、2007、『植民地台湾を語るということ 八田與一の「物語」を読み解く』風響社。

高橋典史、藤野陽平、2010、「企業活動と宗教をめぐるトラブルに関する研究序説 メディア報道の分析を中心に」井上順孝編『インターネット時代における宗教情報リテラシーに関する研究』（平成21年度特別推進研究助成金研究成果報告書）國學院大学神道文化学部。

「ニッポン再発見」倶楽部、2016、『「あの国」はなぜ、日本が好きなのか』知的生き方文庫。

日高勝之、2014、『昭和ノスタルジアとは何か』世界思想社。

平野直子、塚田穂高、2015、「メディア報道への宗教情報リテラシー 「専門家」が語ったことを手がかりに」宗教情報リサーチセンター編（井上順孝責任編集）『<オウム真理教>を検証する そのウチとソトの境界線』春秋社。

藤野陽平、2016、「ホッピーが醸し出すノスタルジア 「昭和」から感じるなつかしさ」ホッピー文化研究会編『ホッピー文化論』ハーベスト社。

三尾裕子、1990、「<鬼>から<神>へ 台湾漢人の王爺信仰について」『民族学研究』55(3)。

三尾裕子、2017、「植民地経験、戦争経験を「飼いならす」日本人を神に祀る信仰を事例に」『日本台湾学会報』19。

林美容、三尾裕子、劉智豪著、五十嵐真子訳、2017、「田中綱常から田中將軍への人神変質 〈族群泯滅〉の民衆史学」『日本台湾学会報』19。

山路勝彦、2007、「台湾で神として祀られた日本兵」崔吉城、原田環編『植民地の朝鮮と台湾 歴史・文化人類学的研究』第一書房。

劉枝萬、1994、『台湾の道教と民間信仰』風響社。

渡邊欣雄、1991、『漢民族の宗教 社会人類学的研究』第一書房。

渡邊欣雄、2017、『術としての生活と宗教 漢民族の文化システム』森話社。

2014、『台湾と日本人』（別冊歴史 REAL）洋泉社 MOOK。

交流協会、2016、「2015年度対日世論調査」。

(https://www.koryu.or.jp/Portals/0/images/business/poll/2015seron_kani_JP.pdf)

海尾鎮安堂、飛虎將軍

<http://www.hikoshogun.org/>

注

1) 国交のない日本と台湾の間には大使館が置かれていないので、交流協会という名称で、実質的な大使館の機能が担われている。

- 2) 現在、筆者は三尾らと日本神に関する共同研究を進めており、把握している数は増え、50を超えている。
- 3) 台湾の保生大帝信仰については尾崎 2007 に詳しい。
- 4) 例えば屏東県枋寮の東龍宮は田中綱常という実在の人物を田中將軍として祀っているが、田中は非業の死をとげた鬼ではなく、神が廟主の夢枕に立つことで成立した（林美容ほか 2017）。
- 5) 飛虎將軍を神として認めた地元の有力な神である保生大帝の誕生日を祝うパレード。
- 6) 本連載が扱った廟と日本神は以下の通り、5月7日第1回「鹿児島軍人の霊が呼ぶ」東龍宮、田中將軍、田中綱常。5月8日第2回「夢枕に立ったヒゲ巡査」福安宮、義愛公、森川清治郎。5月9日第3回「隊長が生きろと命じた」勸化堂、広枝警部、広枝音右衛門。5月10日第4回「故郷へ霊運ぶ軍艦模型」保安堂海衆廟、にっぽんぐんかん。5月11日第5回「商売助けるゼロ戦の男」飛虎將軍廟、飛虎將軍、杉浦茂峰。5月12日第6回「倭寇は何故か金モール」慶隆宮、吉原元帥、吉原小造。